

第8回 ふう太の杜 常田富士男文学賞 講評

第8回ふう太の杜常田富士男文学賞 テーマ「おむすび」のエッセイには、一般の部で八十一、小中学生の部で一、計八十二の作品が寄せられた。

今回のテーマ「おむすび」は、第2回（令和元年）に次ぐテーマであった。おむすびの元米に関しては、今年の春頃から流通が滞り、店頭での米が買えなくなってしまった。そんな時、農林水産省大臣小泉氏により政府備蓄米が放出された。それにより米不足問題は解決したが、新米が流通するに伴い適正価格については未だに落ち着かない。

そのような状況を踏まえたのか、今回は米の価値、つまりご飯やおにぎりの尊さを訴えた作品も目についた。以下、入選作品ごとに要旨と感想を述べ講評に代えたい。

一般の部

常田富士男賞

あたたか想いがつまったおむすび 秋本 美佐子（七十五歳） 静岡県三島市
作者には忘れられない、おむすびの思い出がある。お弁当箱に二つのおむすび。ひとつは三角形の海苔むすび。もうひとつはそばろ昆布を巻いた丸いおむすびだ。それは、小六の長女と小四の次女が握ったおむすびだ。

三十八年前、看護師だった作者。週一回の日勤当直勤務についていた。午前八時半から翌日の午前九時までの仕事。子供たちとは二十四時間会えない状態だった。それが父の計らいで、母の夕食にと、娘たちの握ったおにぎりを母に届けることによって、休憩室で母子の触れ合いが生まれる。

あたたかい想いがいっぱいつまったおむすびは一年間続き、家族を結んでくれた宝物だ。

三十八年前は昭和五十七年で、当時看護婦の日勤当直は、一日の勤務が終えたあと、夜勤に入り翌朝まで続く勤務体制だ。勤務が二十四時間続く重労働であったろう。夜は家に帰れないので、まだ小学生の娘にも会えない寂しさと、夜勤に対する緊張感も湧いてくる。その妻に対する想いを汲んだ夫（父）は、娘たちにおむすびを握らせ、母に届けさせることによって、家族の絆を深める場を設定する。

「食べていいよ」顔をのぞきこむ娘たち。ひとくち口に入れて「うん。おいしいよ」と言ったとたん涙がこみあげました。

こみあげた「涙」には、作者一家の様々な想いがこもっていたのである。

木島平村長賞

ばあちゃんの味噌むすび 山崎 幸正（六十四歳） 長野県中野市

作者の実家、自分の部屋の整理をしていると、小学校低学年に愛読した『オズの魔法使い』が出てきた。所々に薄茶色のシミがある。記憶をたどると、ばあちゃんから大きな味噌むす

びをもらい、食べながら読んだときのシミだった。

その日、夕方まで出かける母に代わって、留守番にやって来たばあちゃん。作者と弟のために、味噌むすびを握って持ってきたのだ。「母ちゃんの作る海苔むすびよりうまい！」思わず声を上げる私と弟。「むすびは丸く包み込むように握るのがコツじゃ。それに表面にまぶした味噌。香ばしくって、実にごはんに合うんじゃない」ばあちゃんが得意気に微笑む。

ばあちゃんは作者が中三の時に亡くなったが、このシミが久し振りにばあちゃんを思い出させてくれた。誇らしげなばあちゃんの顔が脳裏に浮かぶ。

最近年老いた母が、「ばあちゃんにそっくりになってきた」と嘆いているが、ばあちゃんは今もみんなのそばにいる。そんな気がしてならない。

ばあちゃんが得意としていた、味噌むすびの握り方には二つの特徴がある。一つ目は、丸く包み込みように握ること。もう一つは、白いむすびに味噌を万遍なくまぶすこと。香ばしさが絶妙に良いのである。

作者も述べているように信州の農繁期、田んぼでの農作業には、朝食と昼食の間や、昼食と夕食の間にとるおやつ（おこびれ）があった。そんな時に味噌むすびが、手軽に安くあがるので重宝されたのである。

普段は、母の海苔むすびに慣れているが、その時のばあちゃんの味噌むすびは本当に旨く、愛読書が味噌で汚れることも気にならず読み進めていったのだろう。『オズの魔法使い』に残ったシミは、味噌むすびを握った誇らしげなばあちゃんをよび起こすアイテムとなったのである。

佳作

カチカチのおむすび 横尾 春樹（五十九歳） 長野県東筑摩郡朝日村

五年前、心身の不調によって福祉の職を辞した作者が、山の樹木の生育調査をやっていたときの昼食の話。妻が握ってくれた三角おむすびが三つ。山歩きで腹は減っているのだが、食は進まずなんとか一つを食べるのがやっとであった。

ある日、昼になりいつものよう弁当箱を明けると、いつもと違っていくらかこぶりの丸いおむすびが三つは入っていた。そして、「おとう だいすき」と小一の娘のつたない字のメモ。その瞬間、作者の頭から心へと続く暗いトンネルに温かい光が差し込んだような気がしたのである。

手に取ったおむすびはカチカチに固かった。おそらく作者のことを想って何度も何度も繰り返して握ったからであろう。その日は、三つのおむすびを全て平らげることが出来た。

そして今、作者は再び福祉の仕事に就いている。支えられていることに感謝しながら。

作者が心身の不調となった原因は分かりかねない。しかし、五年前といえはコロナが発生した年であり、それに派生する様々な不安が身の回りに過ったことは記憶に新しい。そんな時代の流れの中、おそらく福祉の仕事で生じる人との関係で心身の不調となり、職を辞したのである。

そんな作者に手を差し伸べたのはまず友人である。人と接することのない山の仕事、樹種の調査や生育状況調査を紹介してくれたのだ。そして、一緒に仕事をするSさんの存在。慣れない山仕事に対して「無理せんでな。ゆっくりやったらいいでね」と穏やかに励ましてくれる。最後に家族の絆、妻と娘の心遣いである。

山の仕事、昼食のお弁当、三つの三角おむすび。いつも二つ残っていることに、妻は心配したことだろう。そしてある日、小一の娘にお昼のおむすびと「おとう、だいすき」の手紙をしたためさせた。娘の握った小ぶりの丸いおむすび。どうか食べてくれますようにと、繰り返し握ったカチカチのおむすびは、父の心に明るい光を差し込ませ、再び福祉の仕事に復帰させる原動力となったのである。

佳作

母がむすんだおむすび 新井 洋一（六十九歳） 長野県長野市

洋装店に夫婦住み込みで働く母は、何時も忙しく立ち回っていた。店のレジを締めて二階の六畳間に戻るのは夜の八時を過ぎていた。夕食を仕出して済ませた作者と弟は寝息を立てていて、行商の父はまだ帰っておらず、一家団欒の時間を持つことが出来なかった。朝は暗い内に父を送り出し、洗濯に朝食の準備。ガスにかけた羽釜でご飯を炊きあげ、味噌汁と玉子焼きのご飯を出し、店に向かう。

小校低学年の作者は、学校から帰ると腹ぺこでおやつをねだる。しかし、お勝手には何もない。釜の底にこびりついたご飯をしゃもじで削り、手で無理矢理に包み込む。固い「おこげおむすび」を手渡された。握り損ないのおむすびは掌からポロポロこぼれ、一粒ずつ拾って口に入れる。けれど、空きっ腹の作者には、焦げ臭く歯ごたえのあるおむすびでも、忙しい母が握ってくれたのだから旨い。こぼれ出るご飯一粒一粒に子どもへの思いが込められていたから。

ご飯のうまさほろほろこぼれ 種田山頭火

母のおむすびには美味しい切なさがある。

洋装店をやりくりしている母は、朝から晩まで忙しく子ども世話もままならぬ状況であった。作者の小学校低学年といえは昭和三十年代である。電気洗濯機もあまり普及していなく、盥と洗濯板で洗っていた。ご飯は、ガスコンロにかけた羽釜で炊いていた時代である。学校帰りの作者は何時も腹ぺこだ。店によって母におやつをねだると、母は弟をおぶってお勝手

で向かうが食べ物は何もない。羽釜についた吹きこぼれを食べてごらんといわれても、糊のようなもので腹のたしにはならない。

困った母は、釜の底にこびりついたご飯に目が行く。本当は、白いご飯でおにぎりを握ってやりたいのだが、それもままならず、お焦げをかき集め無理矢理に包み込む。お焦げには粘着力がなく、握ってもポロポロこぼれてしまう。でも作者は、母の子どもへの思いを感じて一粒一粒拾って口にに入れるのである。

山頭火の「ご飯のうまさほろほろこぼれ」は昭和十五年の旅日記（八月十九日）と『層雲』十一月号に記載されている。昭和十五年（十月十一日）と言えば山頭火の没した年である。乞食で得た米を炊いたご飯の旨さと、お焦げのポロポロこぼれる母のおむすびには、美味しい切なさが込められていたのである。

小中学生の部

タツノコ賞

該当作品なし

佳作

おむすびのかたち 宮崎 純大（十四歳） 兵庫県加古川市立氷丘中学校二年

朝寝過ごした中学生の作者、朝食は母が握ったおむすびが二つ。うすく卵で巻かれたおむすびを一つ口に放り込み、学校へ向かう。走らずに歩いていける時間に家を出てほっとした気持ちになった。季節が進み今日の朝の風は涼しくさわやかで軽やかだ。

作者も、作者の妹も、母のおむすびが大好きだ。

母のおむすびには不思議な力がある。僕や妹をコンビニのおむすびも美味しいが、母のおむすびはやさしくてやわらかい味わいがある。テスト前の勉強の夜食にも、母は二つおむすびを作ってくれる。それを口にすると、もうひと頑張りと思えるおむすびで、たくさんの力をもつことができる。今の時代、朝食はパンという方も多いかもしれないが、僕はご飯。母のおむすびで今日という一日を始めたい。その形と味はやさしくて元気をくれるから。

小中学生の部は、この作品だけであった。

朝寝坊をして、朝食代わりに母の握ったおむすびを食べて家を出た作者。中学校に着くまでに母の握ったおむすびについて、思いを巡らす。母の握るおむすびは、やさしくてやわらかい味わいだ。今朝の寝坊したときのピンチに対して、学校に間に合うようにとの心遣いのあるおむすび。テスト勉強の夜食に出されたおむすび、もうひとがんばりと思える味。

何よりも朝食は母のおむすびで、一日の出発としたい。その形と味は、優しさと元気をくれるから。母の握るおむすびの賛歌となった。